外集団脅威と集団内相互依存性¹ ——内集団ひいきの生起過程の多重性——

横田 晋大² 結城 雅樹 北海道大学

Intergroup threat and ingroup interdependence: Multiplicity of psychological processes behind ingroup favoritism, and their distinct elicitors

Kunihiro Yokota and Masaki Yuki (*Hokkaido University*)

Recent research has suggested that two distinct psychological processes lead to ingroup favoritism in the minimal group paradigm (MGP) : the motivation to gain positive intergroup distinctiveness, and the motivation to maintain ingroup cooperation. In this study, we tested a hypothesis based on the adaptationist perspective, that different situational cues suggesting intergroup threat or ingroup interdependence would elicit ingroup favoritism via these distinct psychological processes. Ninety-one Japanese undergraduates participated in a minimal group experiment and performed a reward allocation task. The results supported our predictions. Participants did not show ingroup favoritism in the control condition, where only pure ingroup-outgroup categorization was made. However, they showed ingroup favoritism when they were exposed to intergroup threat in an ostensibly unrelated task prior to reward allocation (intergroup threat condition). Moreover, a positive correlation between ingroup favoritism and the motivation to maximize positive intergroup distinctiveness was observed only in the intergroup threat condition. Likewise, participants showed ingroup favoritism in the interdependence condition, where they were presented with cues suggesting interdependence within the ingroup. The significance and implications of the findings are discussed.

Key words: intergroup discrimination, intergroup threat, ingroup interdependence, minimal group paradigm, social identity theory.

The Japanese Journal of Psychology
2009, Vol. 80, No. 3, pp. 246-251

民族間紛争をはじめとした集団間葛藤を引き起こす心理過程の解明は、社会心理学における伝統的なトピックの一つである。その代表的なアプローチに内集団ひいき研究がある。内集団ひいきとは、自分の所属する内集団に好意的な態度や行動をとる一方で、自分が所属しない外集団には非好意的な態度や行動をとることである。

Tajfel, Billig, Bundy, & Flament (1971) は、内集団ひいきが生じる最小限の条件を特定するため、最小条件集団パラダイム (Minimal Group Paradigm : 以下 MGP とする) と呼ばれる手法を開発した。Tajfel et al.

は互いに見知らぬ人たちで構成される二つの集団を実験室内に設定し、内集団ひいきが生起する条件を検出した。その結果、抽象画の好みの違いなどの些細な基準でカテゴリー分けされた集団状況ですら内集団ひいきが観察された。この結果は多くの追試で頑健に示されてきた (Brewer, 1979; Dobbs & Crano, 2001)。

最小条件集団状況での内集団ひいきの生起要因について、これまで様々な説明原理が提出されてきた (Hewstone, Rubin, & Willis, 2002)。そのうち最も広く受け入れられた説明原理と言えるのが、社会的アイデンティティ理論 (Social Identity Theory : 以下 SIT とする; Tajfel & Turner, 1979) である。SIT によれば、人には肯定的な社会的アイデンティティ (国や大学など所属集団の知識に基づく自己定義) を獲得したいとの基本的な欲求があり、その欲求を満たすため、内集団ひいきを通じて内外集団の利得の差を拡大させようとするのだという。この内集団の相対的優位性の獲得を目的とした内集団ひいきを生み出す心理過程を、以下では集団間比較過程と呼ぶ。

Correspondence concerning this article should be sent to: Kunihiro Yokota, Department of Behavioral Sciences, Graduate School of Letters, Hokkaido University, Kita-ku, Sapporo, Hokkaido 060-0810, Japan (e-mail: yokota@lynx.let.hokudai.ac.jp)

¹ 本研究は文部科学省科学研究費：奨励研究(A)、課題番号：13710053 による助成を受けた。

² 本論文の執筆にあたり、北海道大学大学院文学研究科の竹村幸祐氏と Joanna Schug 氏に多くの助力をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

一方、SITの批判理論として提唱されたのが、閉ざされた一般交換システムに対する期待仮説 (Bounded Generalized Reciprocity Hypothesis: 以下BGRとする; 清成, 2002; Yamagishi, Jin, & Kiyonari, 1999; Yamagishi & Kiyonari, 2000) である。BGRによれば、内集団ひいきは、人が、多くの集団内に存在する集団成員間の一般交換関係を維持することを通じて自己利益を最大化するために、半自動的に生起する適応的な行動傾向だという。特に、Tajfel et al. (1971) が用いたMGPでは、参加者自身が報酬の分配者であると同時に、他の参加者が分配した報酬の受け手でもあるとの意味で集団内に相互依存性が存在する。この集団内の相互依存性の存在が、自分と一般交換関係にあると直感的に理解される内集団成員から間接的なひいきの返報を期待させ、内集団ひいきを生起させるのである。以下、この集団“内”の相互協力を通じて自己利益の拡大を目指す内集団ひいき過程を、集団内相互依存過程と呼ぶ。

その後、MGPにおける内集団ひいきの説明原理として、SITとBGRのいずれが適切かを巡り、実証データに基づく検討がなされてきた。だが、その結果は一貫しなかった (Gaertner & Insko, 2000, Study 2; Gagnon & Bourhis, 1996; 神・山岸・清成, 1996; Karp, Jin, Yamagishi, & Shinotsuka, 1993; 清成, 2002; Rabbie, Schot, & Visser, 1989)。ところが近年、これら二つの理論は相互背反ではなく、MGPでの内集団ひいきの説明原理として両立する可能性が指摘された。Stroebe, Lodewijckx, & Spears (2005) は、MGPに相互依存性が存在すれば集団内相互依存過程が、相互依存性が存在しなければ集団間比較過程が働くことを実験的に示し、この仮説の妥当性を示した。

内集団ひいきを生み出す心理過程の多重性を明らかにしたStroebe et al. (2005) の知見は、二つの理論の相対的優越性を巡る長年の対立に突破口をもたらした。しかし、彼らの仮説の問題は、各心理過程の生起要因が特定されていない点にある。上述のように、Yamagishiらは、集団成員間の相互依存性が集団内相互依存過程の手がかりであることを示した。だが他方、集団間比較過程に基づく内集団ひいきを生起させる状況手がかりは明らかではない。そこで本研究では、集団間比較過程に基づいた内集団ひいきは外集団脅威の状況手がかりから、一方、集団内相互依存過程に基づいた内集団ひいきは集団内相互依存性の状況手がかりから生じるとの仮説を提出し、検証する。以下、適応論的視座から、この仮説を導出する理論的根拠を述べる。

集団内協力と集団間競争 集団状況の適応課題 適応論的視座とは、人間の社会行動のパターンやそれを支える心理過程が、ある特定の社会的環境下で個人に最大の利益 (配偶の機会や危険回避、経済的利得など

を含む) をもたらすようデザインされていると仮定して分析する立場のことである (亀田・村田, 2000)。近年の適応論に基づいた研究では、集団間競争時と非競争時の適応課題の差異と、各状況下で適応的となる集団行動の特徴が明らかにされてきた (Brewer, 1999; Kurzban & Neuberg, 2005; Tooby & Cosmides, 1988; Yuki & Yokota, 2009)。

まず、集団間非競争状況で個人が直面する適応課題は、集団内の一般交換関係の形成・維持である (清成, 2002; Yamagishi et al., 1999)。人間は、集団内の一般交換を通じて自分自身の生存や子孫の繁栄に必要な資源を獲得してきた。こうした集団内には、集団の生産性維持のため、成員間で相互監視・制裁システムが機能しており、非協力者は交換関係から排除されることがある。関係からの排除は内集団成員への協力のコストをはるかに上回る。よって、人は、成員間の相互依存関係の存在を仮定できる集団状況では、半自動的に内集団に協力する行動傾向を備えているとされる。しかし、集団内に相互依存関係が存在しない状況では、協力行動は自分に返報されず、無駄骨となる。よって単に社会的カテゴリーを共有しただけの内集団成員への協力は適応的ではなく、結果として内集団ひいきは生起しない (Yamagishi et al., 1999)。以上は、BGRが予測する内集団ひいきの生起パターンである。

一方、集団間に競争があり、内集団全体が外集団に脅かされる状況での適応課題は、内集団を勝利に導くことである (Kurzban & Neuberg, 2005; Tooby & Cosmides, 1988)。集団間競争状況とは、集団間で絶対量が決まっているゼロサム型の資源を巡る状況である (Sherif, Harvey, White, Hood, & Sherif, 1961)。よって、この状況下では、内集団の勝利が個人の利益を大きく増加させるため、外集団の力を削ぎ、内集団を優位にする行動が適応的である。これは、SITで予測される、内外集団間の利益の差を拡大する動機 (以下、“差の拡大動機”とする) に基づく内集団ひいきのパターンと一貫する。

こうした異なる適応課題に対応した内集団ひいきは、直面した課題にいち早く反応して即座に解決を試みることが重要なため、それぞれ異なる状況手がかりへの半自動的に反応という形で表れるだろう (Tooby & Cosmides, 1992)。よって、外集団脅威の手がかりが存在するときには集団間比較過程から、集団内相互依存性の手がかりが存在しないときには集団内相互依存過程から、半自動的に内集団ひいきが生じると予測される。

上記の理論仮説の傍証となる知見が、集団認知研究 (Brewer, Weber, & Carini, 1995, study2) とリーダーシップ研究 (高口・坂田・藤本, 2007, 研究1) から得られている。いずれにおいても、内外集団間の競争が存在するときにはSITの主張と一貫する心理過程が生

じるが、集団間競争が存在しない状況では BGR の主張と一貫する心理過程が生じることが見出されている。

以上より、次の理論仮説が成り立つ。MGP での内集団ひいきは、外集団脅威の手がかりからは集団間比較過程を経て、集団内相互依存性の手がかりからは集団内相互依存過程を経て、それぞれ生起するだろう。

方 法

本研究では、以上の理論仮説を検証するため、状況手がかりが何ら存在しない純粋な最小条件集団状況である統制条件を基準として、外集団脅威の手がかりのみを加えた外集団脅威条件、及び集団内相互依存性の手がかりのみを加えた相互依存条件を用意し、統制条件で見られない内集団ひいきが、他の 2 条件で生じるか否かを検討した。

参加者 参加者は北海道大学の学生 91 名（男性 52 名、女性 39 名）だった。実験参加の依頼の際には金銭報酬が強調された。1 セッションあたり 6 名が参加し、6 名未満の場合は実験協力者が参加した。協力者は実験中に特別な行動はせず、他の参加者と同様に実験に参加した。

実験デザイン 参加者は、統制条件、外集団脅威条件、相互依存条件のいずれか一つに無作為に割り振られた。

手続き 参加者は実験室に案内され、互いに間隔を空けて座った。6 人全員が揃ったところで実験が開始された。まず実験の説明がなされ、参加者は二つの互いに無関係な実験に参加すると告げられた。しかし実際は、“第一実験”は外集団脅威の手がかり操作を目的としており、また“第二実験”は集団内相互依存性の手がかり操作と内集団ひいきの測定を目的としていた。

外集団脅威の手がかり まず、“第一実験”と称して、外集団脅威の手がかりの操作が行われた。冒頭の“言語課題”と称した課題の内容は名詞探索作業であり、参加者は、制限時間 5 分以内に、三つのエッセイの中から名詞を見つけ出し、それらを全て丸で囲うよう求められた。その際、外集団脅威条件では、2 番目のエッセイが、外国人（外集団）が日本人（内集団）の生活様式を“模倣しかせず独自性が無い”などと強く批判（侮辱）する架空の内容だった。一方、他の 2 条件の 2 番目のエッセイ、及び全条件の 1 番目と 3 番目のエッセイは、外集団脅威とは無関係な内容（芸術の概念、ビールの製造法、シックハウス症候群についての文章）だった。言語課題の終了後、ディストラクション課題として 30 秒間の簡単な加算問題が行われた。全ての課題が終了した後、第一実験は終了した。

内集団ひいきの測定 次に、“第二実験”と称し、最小条件集団状況での内集団ひいきを測定するセッ

ションが開始された。まず、第一実験と第二実験の関連の無さを強調するため、私服姿の第一実験の実験者が白衣姿の第二実験の実験者と交代した。更に、反応の匿名性を高めるため、参加者の机の上に手元が隠れる高さのついたてを設置した。実験室の設定が終わると、参加者は、“感性を調べるための課題”を行うと教示された。

まず、絵画選好課題が行われた。Tajfel et al. (1971) の手続きに倣い、現代画家の“クレー”と“カンディンスキー”の絵が 1 ペアずつ実験室前方のスクリーンに提示され、参加者はそのどちらを好むかを回答した。絵画の選好判断は、全部で 7 回行われた。

次に、その後行われる“意思決定課題”の説明が行われ、先の絵画選好課題の集計結果を元に、参加者たちが二つの集団に分けられる旨が告げられた。そして、課題の結果を記した冊子が配布され、各参加者は、自分が所属する集団の名前（“カンディンスキー集団”または“クレー集団”）と、各集団の所属人数が三人ずつであることを教示された。ただし、手続きの簡略化のため、実際には絵画選好課題の集計は行われず、参加者は全て“カンディンスキー集団”に属すると教示された。

次に、意思決定課題と称した報酬分配作業が行われた。この作業は、実験後に内外集団成員 1 名ずつが受け取る報酬金額を決定するものであった。

集団内相互依存性の手がかり この課題の教示の中で、Karp et al. (1993) に倣い、集団内相互依存性の手がかりが操作された。手がかりの操作は、成員間で互いに報酬を決め合う相互運命統制 (Thibaut & Kelley, 1959) の有無により行われた。相互運命統制が可能な相互依存条件では、元来の MGP と同様に、参加者全員が報酬分配作業を行い、参加者自身の報酬は、内外集団成員各 1 名の決定額の平均が採用されると教示された。このとき、自分が報酬を分配する対象の成員と、自分の報酬額を決める成員は別々の参加者であることが強調された。一方、統制条件と外集団脅威条件の参加者は、くじ引きの結果に応じて、報酬分配課題を含む数種類の課題のいずれかを行うと教示された。その後に行われたくじ引きの結果、参加者自身と外集団成員 1 名のみが分配課題に割り当てられ、他の参加者は別の課題に割り当てられたと告げられた。これはすなわち、成員間の相互運命統制が不可能な状況であると強調する教示だった。参加者自身の報酬は、具体的な額は示されておらず、実験者により一定額が提供されると教示された。ちなみに、実際は、全参加者が分配作業に割り当てられていた。

以上の教示を読んだ後、参加者は報酬分配作業を行った。先行研究に則り（神・山岸・清成, 1996; Karp et al., 1993）、この作業で参加者は、実験者から与えら

れた 500 円の元手を、内外集団成員一人ずつの間で分配した。ここでの内集団成員への分配額が、内集団ひいきの指標となった。

報酬分配を終えた参加者は、別の冊子を受け取り、報酬分配時の差の拡大動機や実験手続きへの疑いなどを尋ねられた。差の拡大動機は、“あなたは今回、自分の集団と相手の集団の報酬金額の差を大きくすることを重視して、他の人の報酬を決定しましたか？”と尋ねられ、7 点尺度（1 全く重視しなかった－7 非常に重視した）で回答した。回答を終了した参加者は、報酬を受け取って退室した。実験の全セッションが終了した後、デブリーフィングがなされた。

予測 本研究の予測は以下の通りである。

統制条件（外集団脅威と集団内相互依存性のいずれの手がかりも与えない条件）では内集団ひいきが生じないだろう（予測 1）。外集団脅威条件（外集団脅威の手がかりのみを与える条件）では内集団ひいきが生じるだろう（予測 2）。相互依存条件（相互依存性の手がかりのみを与える条件）では内集団ひいきが生じるだろう（予測 3）。

更に、外集団脅威条件での内集団ひいきは集団間比較過程から生じることから、差の拡大動機に基づくと予測される。

外集団脅威条件では、差の拡大動機と内集団ひいきの強さが正相関するだろう（予測 4）。統制条件と相互依存条件では、差の拡大動機と内集団ひいきの強さに関連がないだろう（予測 5）。

結 果

以下の分析では、言語課題の遂行が遅く、時間内に実験操作の刺激文まで到達しなかった 1 名、自分の集団所属を誤認していた 3 名、実験のカバーストーリーを疑っていた 2 名の計 6 名を削除した。よって、各条件の最終的な標本サイズは、統制条件 31 名、外集団脅威条件 27 名、相互依存条件 27 名だった。

内集団ひいき 内集団ひいきは、500 円の半額である 250 円より統計的に有意に多い額が内集団成員へと分配された場合に生じたとみなした。各条件における内集団成員への分配額の平均値と標準偏差を Table 1 に示す。各条件で内集団ひいきが生じたかを検討するため、250 円からの差を検定した結果、予測 1, 2, 3 と一貫して、統制条件では有意差は見られず ($t(30) = 0.65, p = .52$)、外集団脅威条件 ($t(26) = 2.46, p < .05$) 及び相互依存条件 ($t(26) = 3.24, p < .01$) では有意差が見られた。更に、一元配置の分散分析を行うと、条件間の差が有意だった ($F(2, 84) = 3.63, p < .05$)。そこで Scheffé の事後比較により条件間の差を検定した。その結果、統制条件と外集団脅威条件との間では有意差が見られたが ($p < .05$)、統制条件と相互依存条件との間では有意差は見られなかった ($p = .26$)。

Table 1
Means and SDs of the amount of money allocated to the ingroup member

Condition		
Control (<i>N</i> = 31)	Intergroup threat (<i>N</i> = 27)	Interdependence (<i>N</i> = 27)
243.58 (55.39)	277.41 (57.95)	266.67 (26.75)

Note 1. Standard deviations are shown in parentheses.

Note 2. The unit is Japanese yen.

外集団脅威条件と相互依存条件との間には有意差は見られなかった ($p = .68$)。以上より、統制条件よりも外集団脅威条件における内集団ひいきの方が強いことが示された。

内集団ひいきと差の拡大動機の相関 外集団脅威条件と相互依存条件において内集団ひいきを生み出した動機を検討するため、条件毎に、内集団ひいきと差の拡大動機との相関係数を算出した。その結果、予測 4, 5 と一貫して、外集団脅威条件では正の相関が見られ ($r = .90, p < .01$)、統制条件と相互依存条件では有意な相関は見られなかった（統制条件： $r = .05, p = .80$ ；相互依存条件： $r = .12, p = .76$ ）。外集団脅威条件と統制条件、及び外集団脅威条件と相互依存条件との間で相関係数の差をそれぞれ検定した結果、いずれも外集団脅威条件の相関係数が有意に強かった（統制条件と外集団脅威条件の差： $z = 5.11, p < .01$ ；相互依存条件と外集団脅威条件の差： $z = 4.68, p < .01$ ）。これらの結果は、外集団脅威の手がかりが存在するときには差の拡大動機から、手がかりが存在しないときには差の拡大動機とは別の要因から、内集団ひいきが生起することを示している。

考 察

本研究の目的は、MGP での内集団ひいきが集団間比較過程と集団内相互依存過程という 2 種類の心理過程から生じ (Stroebe et al., 2005)、それらがそれぞれ外集団脅威と集団内相互依存性という異なる状況手がかりから生じることを示すことにあった。MGP を用いた実験室実験を行ったところ、参加者たちは、外集団脅威の手がかりが存在すると、集団内相互依存性の手がかりが存在しなくとも内集団ひいきを示した。更に、この内集団ひいきは、内外集団間の差の拡大動機と関連していた。一方、集団内相互依存性の手がかりが存在すると、外集団脅威の手がかりが存在しなくとも内集団ひいきが生じたが、ひいきの強さと差の拡大動機とは無関連だった。以上の結果は、集団状況での質的に異なる適応課題を示唆する 2 種類の状況手がかり（外集団脅威と集団内相互依存）は、各課題の解決に適した集団間比較過程と集団内相互依存過程を通じ

て内集団ひいきを引き起こすとの本研究の仮説と一致するものである。

本研究の限界 本研究にはいくつかの限界がある。第一に、相互依存性の手がかりの操作の効果が弱かった。たしかに、予測通り、統制条件では有意な内集団ひいきが生起せず、相互依存条件では生起していた。だが、両条件間の差は有意に達しなかった。先行研究と同じパラダイムを用いたにも関わらず、なぜ相互依存性の手がかりの効果が十分に強くはなかったのかについて、今後更なる追試が必要である。

第二に、本研究では、相互依存条件において集団内相互依存過程が働いた証拠となる動機（例えば互酬性の維持動機; Karp et al., 1993）が測定されていなかった。その理由は、集団成員間の相互依存性が欠落した統制条件と外集団脅威条件では、互酬性の維持は現実的に達成不可能であり、この動機を尋ねること自体が不自然であったためである。今後の研究では、例えば相互依存性の“幻想”（Karp et al., 1993）を測定する尺度等（神他, 1996）を導入して、この点を確認すべきであろう。

第三に、本研究の結果からは、二つの内集団ひいきの心理過程が、同時に働いて得ない相互相反な過程なのか、それとも同時に活性化し得る過程なのかは判然としない。今後は、二つの状況手がかりが同時に存在するとき、どちらか一方の心理過程のみが内集団ひいきを引き起こすのか、それとも両者が加算的に働くのかを検討する必要があるだろう。

結論 本研究では、適応論的視座に基づき、MGPでの内集団ひいきを生み出す2種類の心理過程のそれぞれを誘発する状況手がかりを同定した。一見、単一のメカニズムから生じるように見えがちな集団行動の背後にある心理過程の多様性を明らかにすると共に、適応論の観点からそのいずれがいかなる状況で働くかを左右する要因を理論的に特定することは、今後の集団間行動研究の発展に大きく寄与すると期待される。

引用文献

- Brewer, M. B. (1979). In-group bias in the minimal intergroup situation: A cognitive-motivational analysis. *Psychological Bulletin*, **86**, 307-324.
- Brewer, M. B. (1999). The psychology of prejudice: Ingroup love or outgroup hate? *Journal of Social Issues*, **55**, 429-444.
- Brewer, M. B., Weber, J. G., & Carini, B. (1995). Person memory in intergroup contexts: Categorization versus individuation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 29-40.
- Dobbs, M., & Crano, W. D. (2001). Outgroup accountability in the minimal group paradigm: Implications for aversive discrimination and social identity theory. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **27**, 355-364.
- Gaertner, L., & Insko, C. A. (2000). Intergroup discrimination in the minimal group paradigm: Categorization, reciprocation, or fear? *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 77-94.
- Gagnon, A., & Bourhis, R. Y. (1996). Discrimination in the minimal group paradigm: Social identity or self-interest? *Personality and Social Psychology Bulletin*, **22**, 1289-1301.
- Hewstone, M., Rubin, M., & Willis, H. (2002). Intergroup bias. *Annual Review of Psychology*, **53**, 575-604.
- 神 信人・山岸 俊男・清成 透子 (1996). 双方向依存性と“最小条件パラダイム” 心理学研究, **67**, 77-85.
- (Jin, N., Yamagishi, T., & Kiyonari, T. (1996). Bilateral dependency and the minimal group paradigm. *Japanese Journal of Psychology*, **67**, 77-85.)
- 亀田 達也・村田 光二 (2000). 複雑さに挑む社会心理学——適応エージェントとしての人間—— 有斐閣
- (Kameda, T., & Murata, K. (2000). *Social psychology from the complex system perspective: Humans as Adaptive Agents*. Tokyo: Yuhikaku)
- Karp, D. R., Jin, N., Yamagishi, T., & Shinotsuka, H. (1993). Rising the minimum in the minimal group paradigm. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **32**, 231-240.
- 清成 透子 (2002). 一般交換システムに対する期待と内集団ひいき——閉ざされた互酬性の期待に関する実験研究—— 心理学研究, **73**, 1-9.
- (Kiyonari, T. (2002). Expectations of a generalized exchange system and ingroup favoritism: An experimental study of bounded reciprocity. *Japanese Journal of Psychology*, **73**, 1-9.)
- 高口 央・坂田 桐子・藤本 光平 (2007). リーダーシップとプロトタイプ性が集団成員のモラルとリーダー知覚に及ぼす影響 社会心理学研究, **22**, 245-257.
- (Kohguch, H., Sakata, K., & Fujimoto, K. (2007). The effects of leadership and prototypicality on group member's morale and leader perception. *Japanese Journal of Social Psychology*, **22**, 245-257.)
- Kurzban, R., & Neuberg, S. L. (2005). Managing ingroup and outgroup relationships. In D. M. Buss (Ed.), *Handbook of evolutionary psychology*. New York: Wiley. pp. 653-675.
- Rabbie, J. M., Schot, J. C., & Visser, L. (1989). Social identity theory: A conceptual and empirical critique from the perspective of a behavioural interaction model. *European Journal of Social Psychology*, **19**, 171-202.
- Sherif, M., Harvey, O. J., White, B. J., Hood, W. R., & Sherif, C. W. (1961). *Intergroup conflict and cooperation: The robbers cave experiment*. Norman, OK: Institute of Group Relations.
- Stroebe, K., Lodewijkx, H. F. M., & Spears, R. (2005). Do unto others as they do unto you: Reciprocity and

- social identification as determinants of ingroup favoritism. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **31**, 831-845.
- Tajfel, H., Billig, M. G., Bundy, R. P., & Flament, C. (1971). Social categorisation and intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology*, **1**, 149-178.
- Tajfel, H., & Turner, J. C. (1979). An integrative theory of intergroup conflict. In W. G. Austin & S. Worchel (Eds.), *The social psychology of intergroup relations*. Monterey, CA: Brooks-Cole. pp. 33-48.
- Thibaut, J. W., & Kelley, H. H. (1959). *The social psychology of groups*. New York: John Wiley & Sons.
- Tooby, J., & Cosmides, L. (1988). The evolution of war and its cognitive foundations. *Institute* (Institute for Evolutionary Studies Technical Report 88-1). <http://www.psych.ucsb.edu/research/cep/papers/Evolofwar.pdf> (October 6, 2007)
- Tooby, J., & Cosmides, L. (1992). The psychological foundations of culture. In J. Barkow, L. Cosmides, & J. Tooby (Eds.), *The adapted mind: Evolutionary psychology and the generation of culture*. NY: Oxford University Press. pp. 19-136.
- Yamagishi, T., Jin, N., & Kiyonari, T. (1999). Bounded generalized reciprocity: Ingroup favoritism and ingroup boasting. *Advances in Group Processes*, **16**, 161-197.
- Yamagishi, T., & Kiyonari, T. (2000). The group as the container of generalized reciprocity. *Social Psychology Quarterly*, **63**, 116-132.
- Yuki, M., & Yokota, K. (2009). The primal warrior: Outgroup threat priming enhances intergroup discrimination in men but not women. *Journal of Experimental Social Psychology*, **45**, 271-274.

——2007. 9. 10 受稿, 2009. 3. 7 受理——